

・・・明治大学特別功労賞受賞者・・・

倉橋 由美子 (1935~2005) 小説家

高知県生まれ。土佐高等学校卒業後、明治大学文学部に入学。1960年、在学中に発表した短編小説『バルタイ』が明大新聞「第4回学長賞」を受賞。平野謙の芸文時評欄でとりあげられ、有望な新人作家として注目される。1961年に女流文学賞、1963年に田村俊子賞を受賞。1966年より米国のアイオワ州立大学に留学。帰国後、1969年に『スキヤキストQの冒険』を刊行し話題となる。1983年に『アマノン国往還記』（泉鏡花文学賞）、1984年『大人のための残酷童話』はロングセラーとなる。また、シェル・シルバスタイン『ぼくを探しに』、サン＝テグジュペリ『新訳星の王子さま』など翻訳も多く手がけた。現在も国内外から高い評価を集めている。2006年、本学より特別功労賞を授与。

阿久 悠 (1937~2007) 作詞家・作家・小説家

兵庫県淡路島生まれ。明治大学文学部卒業。広告代理店勤務を経て、放送作家・作詞家として活動を本格化させ、「また逢う日まで」「勝手にしやがれ」「UFO」など数々のヒット曲を発表する。手掛けた5000曲以上に及ぶその歌の世界は、アイドルから演歌、POPS、アニメ主題歌と多岐に渡り、世代を超えて日本人の心を捉え続け、「日本レコード大賞」「日本歌謡大賞」「日本作詞大賞」「古賀政男記念音楽大賞」などの賞を多数受賞。企画、審査員として携わったテレビ番組「スター誕生」では、森昌子、桜田淳子、山口百恵、小泉今日子など、多数のトップスターを輩出した。また、小説家としても活躍し、『瀬戸内少年野球団』は直木賞候補作となり映画化もされた。1997年、第45回菊池寛賞受賞。1999年、紫綬勲章受章。

・・・選者プロフィール・・・

井上 善幸 理工学部教授
教養デザイン研究科教授
ヨーロッパ精神史研究

1958年生まれ、兵庫県出身。

専門は20世紀ヨーロッパ文学および哲学。長年にわたりサミュエル・ベケットの研究に取り組む。在外研究では、英国のレディング大学にてベケットの草稿研究に従事。主な共編著書に『サミュエル・ベケットと批評の遠近法』（未知谷、2016年）、*Beckett and Animals*, ed. M. Bryden (Cambridge: Cambridge University Press, 2013)、共訳として、ジェイムズ・ノウルソン『ベケット伝（上・下）』（白水社、2003年）などがある。

大学院時代には、ベケット研究と平行してジャック・デリダの著作と格闘し、かれの思考をDNAとして取り込む。ホルヘ・ルイス・ボルヘスの精神史的解読にも取り組み、明治大学教養論集562号(2022)に「ボルヘスの記憶術」と題した論文も発表している。

三田 完 作家

1956年生まれ、埼玉県出身。

慶應義塾大学文学部卒業後、NHKでディレクターとして主に音楽番組を担当。NHK退職後、阿久悠の作詞、出版活動にブレーンとして関わる。2000年に小説『櫻川イワンの恋』で第80回オール読物新人賞受賞。小説のほか『小沢昭一の小沢昭一的こころ』（TBSラジオ）の台本を執筆。著書に『俳風三麗花』（文春文庫）、『当マイクロフォン』（角川文庫）、『モーニングサービス』（新潮社）、『歌は季につれ』（幻戯書房）、『不機嫌な作詞家・阿久悠日記を読む』（文藝春秋）、『鶴』（角川書店）など。日本文藝家協会会員。

福岡 具子 文学部教授・ドイツ近現代文学研究者

1974年生まれ、青森県出身

専門はドイツ近現代文学、特にドイツ語圏ユダヤ系文学。東京大学大学院人文社会系研究科ドイツ語ドイツ文学専攻博士課程修了。博士（文学）。20世紀最大の詩人と呼ばれるパウル・ツェランの詩論と詩作品の分析によって博士論文を執筆し、『具有される異性—パウル・ツェランの内なる詩学』（Book Park 2004年）を出版。その後、戦後生まれでホロコースト体験者の子孫の世代に当たる現代ユダヤ系作家たちが、先行世代の迫害の記憶の影響をどのように受け、引き裂かれたアイデンティティをどのような言語表現を用いて表象しているのかを研究している。共著に *Deutschsprachige Literatur und Theater seit 1945 in den Metropolen Tokio, Seoul und Berlin.* (University of Bamberg Press) など。

谷本 道昭 経営学部准教授・フランス文学研究者

1980年生まれ、東京都出身。

専門は19世紀フランス文学。博士（パリ第七大学）。フランス七月王政期の文学と出版文化を研究対象としている。映画や美術、パリや東京の都市文化に関心を持ちつづけ、国際交流やあれこれの社会・文化活動に生きがいを感じながらも、今後数年はなるべく寄り道をひかえ、本業のバルザック研究に邁進する予定。共著に『フランス文学を旅する60章』（明石書店、2018年）、*Lire, voir, penser l'œuvre de Jean-Philippe Toussaint* (Impressions nouvelles, 2020)、共訳にアンドレ・バザン『映画とは何か』（岩波文庫、2015年）、論文に「〈マテイラム・ミスラ〉再訪—芥川龍之介『魔術』別解の試み」（『言語・情報・テクスト』第27号、2020年）、「拒絶された手紙—書簡=小説としての初版『谷間の百合』」（『人文科学論集』第68輯、2022年）などがある。